The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』について : 形制一覧と所収文献概要
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2006, 40, p. 50-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61036
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊露号（総四十号）平成十八年六月　五〇―六六頁

『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』について
―形制一覧と所収文献概要―

草野友子

はじめに

二〇〇五年十二月、上海古籍出版社より馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』が刊行され、日本には二〇〇六年二月末頃に輸入された。これまで『上海博物館蔵戦国楚竹書』は二〇〇一年十一月に第一分冊、二〇〇二年十二月に第二分冊、二〇〇四年三月に第三分冊、二〇〇四年十二月に第四分冊が刊行された。本書はその続編の第五分冊に当たる。

この第五分冊には、『競建内之』・『鮑叔牙與隰朋之諫』・『季庚子問於孔子』・『姑成家父』・『君子爲禮』・『弟子問』・『三德』・『鬼神之明　融師有成氏』の八文献が収録されている。

本稿では、その速報として、まず第五分冊全体の形制一覧を作成して掲載し、続いて第五分冊所収の全文献の概要を報告する。

一　上博楚簡（五）形制一覧

本表は、馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』（上海古籍出版社、二〇〇五年十二月）の釈文担当者の説明に基づいて、その形制をまとめたものである。

各文献について、竹簡の枚数、簡長、編綫、契口、簡端、完簡・整簡、残簡、字数、篇題、備考を記す。

上博楚簡（五）形制一覧表

No.	分冊	名称	枚数	簡長（cm）	編綫	契口	簡端	完簡 (整簡)	残簡	字数	篇題	備考
22	五	競建内之	10	42.8 ～ 43.3	三道	右	平斉	7	3	347	「競建内之」 第 1 簡背面	『鮑叔牙與隰朋之諫』と併せて一篇か。
23	五	鮑叔牙與隰朋之諫	9	40.4 ～ 43.2	三道	右 8 左 1	平斉	7	2	340	「鮑叔牙與隰朋之諫」 第 9 簡	『競建内之』と併せて一篇か。
24	五	季庚子問於孔子	23	38.6 ～ 39.0	三道	右	平斉	8 (4)	11	669		
25	五	姑成家父	10	43.7 ～ 44.4	三道	右	平斉	6	4	466		
26	五	君子爲禮	16	54.1 ～ 54.5	三道	右	平斉	2	14	342		『弟子問』の一部と連続する可能性あり。
27	五	弟子問	25	残簡最長 45.2	三道	右	平斉	なし	25	494		
28	五	三德	22+1	44.7 ～ 45.1	両道	右	平斉	5 (10)	8	898		一枚は香港中文大学中国文化研究所文物館所蔵。
29	五	鬼神之明 融師有成氏	8	整簡最長 52.1	三道	右	平斉	(2)	6	197 122		第 1 簡に留白。 第 2 簡背面に補足。 第 5 簡の墨節で区分。

【補足】

(1) 表中の「No.」は、『中国研究集刊』第三十八号（別冊『戦国楚簡研究２００５』、二〇〇五年十二月）掲載の「上博楚簡形制一覧表」からの連番である。

(2) 完簡と整簡との区別

『中国研究集刊』第三十八号掲載の「書誌情報用語解説（二）」において、整簡を「上下二つ、或いは三つに折れた残簡同士を接合して、文字の欠落が無い一本の竹簡の形にしたもの」と定義する。また、「但し、『上海博物館蔵戦国楚竹書』においては、接合して一本の形にした竹簡と、もともと完全な形を保っている竹簡とについて、各文献の釈読者の間に用語の不統一が見られる。」と述べる。第五分冊においても釈文担当者によって用語の不統一が見られるため、本表では「書誌情報用語解説（二）」の定義に従って、簡数を改めた箇所がある。

(3) 『競建内之』・『鮑叔牙與隰朋之諫』の釈文担当者である陳佩芬氏は、『競建内之』・『鮑叔牙與隰朋之諫』の全竹簡は「ほぼ完簡」としているが、実際には欠損している竹簡があるため、筆者はこれらを完簡ではなく残簡とみなして表に反映させた。

二　上博楚簡（五）文献概要

［凡例］

(1) 書誌情報……釈文担当者、篇題の有無、竹簡の状態、字数、字体、字間、標号など、書誌の情報を掲載する。また、その状況を各々図示する。

(2) 概要……第五分冊の文献の内容を概説する。

(3) 他の排列案など……釈文担当者以外の排列案などを掲載する。（なお研究者によっては部分的な排列案を提案している。）

(4) 補足・その他……筆者による補足、及び現時点（二〇〇六年三月現在）での私見を記載する。

・〈　〉内の算用数字は、竹簡番号を示す。（〈〇１〉等の〇に当てはまる字は、篇題の頭文字より取る。）

「＋」は文脈上、竹簡が完全に接続することを示す。

「……」はおおよそ接続が認められるものの、欠簡が存在する可能性があることを示す。「、」は接続しないことを示す。

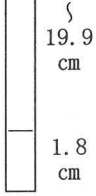
・書誌情報に関する専門用語は、『中国研究集刊』第三十三号（別冊特集『新出土資料と中国思想史』、二〇〇三年六月）掲載の「書誌情報用語解説」、および『中国研究集刊』第三十八号（前掲書）掲載の「書誌情報用語解説（二）」を参考にした。

『競建内之』（きょうけんないし）

（1）書誌情報

釈文担当者は、陳佩芬氏である。篇題は、第一簡背面に「競建内之」とある。全十簡。完簡は七簡。残簡は三簡。竹簡の排列は、〈1〉＋〈2〉＋〈3〉＋〈4〉……〈5〉＋〈6〉……〈7〉＋〈8〉＋〈9〉＋〈10〉とする。

編綫は三道。右契口。簡端は平斉。簡長・契口位置は、『鮑叔牙與隰朋之諫』とほぼ同じである。



簡長 42.8 cm～43.3 cm

現存文字数は三百四十七字（合文一）。各簡に書写されている字数は、三十二～三十六字。書体は整っており、字間は基本的に均等である。天頭（上の端部）、地脚（下の端部）に若干の留白はあるが、簡いっぱいに書写され、みな竹黄に書かれている。

本篇は同じ字で異なる写法を用いることがある。例えば、「隰」の字には三種の写法（「級」・「汲」・「伋」）があり、これによって楚文字の信頼できる字形の用例が増加した。

〈1〉級

〈2〉汲

〈5〉汲

〈9〉伋

また、〈6〉に墨釘がある。

（2）概要

本篇は隰朋・鮑叔牙と斉の桓公との対話を記述している。陳佩芬氏の「説明」に基づく概要は以下の通りである。

二大夫は治国の要事（重要事項）を斉の桓公に進言す

る。「日食」は天体現象であるが、斉国に兵乱の災が起ころうとしていることを示唆している。よって二大夫は次のように考えた。先王の法を行い、「廃古簟、行古作（古簟を廃し、古作を行う）」ように桓公に勧め、祇（地の神）がその善行に従ってくれて、はじめて禍患を去ることができる、と。

隰朋と鮑叔牙とに関する事は、史書に多く記載されているが、本篇の内容はそれらには見られないものである。

（3）他の排列案

・陳剣氏は、『競建内之』と『鮑叔牙與隰朋之諫』とを併せて一篇と見る。氏は「談談《上博（五）》的竹簡分篇・併合与編聯問題」（簡帛網、二〇〇六年二月十九日）において、次の排列案を提案している。

〈1〉……〈5〉＋〈6〉＋〈2〉＋〈7〉＋〈4〉＋〈3〉＋〈8〉＋〈9〉＋〈10〉（↓『鮑叔牙與隰朋之諫』〈4〉に接続。以下、『鮑叔牙與隰朋之諫』の竹簡を排列する。詳細は『鮑叔牙與隰朋之諫』の項を参照。）

・林志鵬氏は、次の排列案を提案している。

〈1〉＋〈2〉＋〈7〉＋〈4〉＋〈8〉＋〈9〉＋〈10〉……〈5〉＋〈6〉＋〈3〉

（4）補足・その他

『競建内之』と『鮑叔牙與隰朋之諫』とは、いずれも斉の桓公・鮑叔牙・隰朋・豎刁・易牙が登場する。陳剣氏は、『競建内之』と『鮑叔牙與隰朋之諫』とを併せて一篇と見る。竹簡の形制の面から見ると、これら二篇の契口位置はほぼ同じであるため、一篇とみなすことは可能である。

斉の桓公の在位時期（前六八五～前六四二年）に該当する『春秋』の日食記事は、荘公十八年、荘公二十五年、荘公二十六年、荘公三十年、僖公五年、僖公十二年、僖公十五年が挙げられる(注1)。これらの日食に該当するかどうかはともかく、桓公の在位期間に日食が頻発していることは明らかである。よって、本文献の日食記事は、事実を背景に著作された可能性が高い。

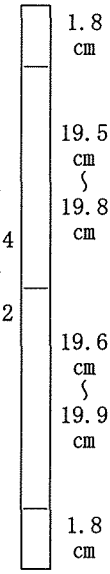
『鮑叔牙與隰朋之諫』
（ほうしゅくがとしゅうほうとのかん）

（1）書誌情報

釈文担当者は陳佩芬氏である。〈9〉に篇題がある。陳佩芬氏は、おそらく習慣として篇末に篇題を置いたので

あろうと述べる。現存九簡。完簡は七簡。残簡は二簡。おおよそ連続しているが、〈1〉＋〈2〉と〈3〉～〈8〉との間に欠簡がある可能性がある。

編綫は三道。右契口、〈2〉のみ左契口。簡端は平斉。簡長、契口位置は『競建内之』とほぼ同じである。



現存文字数は三百四十字。各簡には三十三～五十一字が書写されており、不均等である。書体は整っており、字間は基本的に均等である。天頭、地脚に若干の留白はあるが、簡いっぱいに書写され、みな竹黄に書かれている。篇末〈8〉に墨鉤があり、以下は留白になっているので、本文の終わりを示している。

（2）概要

陳佩芬氏の「説明」に基づく概要は以下の通りである。

鮑叔牙・隰朋の二大夫が斉の桓公に直諫し、夏が殷に、殷が周に取って代わられた原因は、その様子を見ただけで、その言を聞かなかったことによると指摘する。また、民衆に対しては善の心が必要であること、老弱に対しては刑を用いることはできないこと、あらゆる点で国家利益から出発するべきであることを指摘する。そうしなければ斉の国は疲弊の状態になって、人々はみな憂いを抱く。豎刁・易牙などの人、つまり「邦家を以て事を為さず、公の欲する所を縦（ほしいまま）にする」者を起用することは、国の災難を招く。彼らは謀略を行い、あなた（桓公）はそれを阻止することができず、結果として必ず公の身に害が及ぶでしょう、と。それを聞いた桓公は自ら祭祀を行った。

（3）他の排列案

・季旭昇氏は「上博五劄議（上）」（簡帛網、二〇〇六年二月十八日）において、次の排列案を提案している。

……〈9〉……〈4〉＋〈5〉＋〈6〉＋〈7〉……〈3〉……〈1〉＋〈2〉……〈8〉

・陳劍氏（前掲論文）は、季旭昇氏の排列案に賛同するものの、各簡に欠簡はなく、みな連続すると考える。また、〈4〉と『競建内之』の〈10〉とは接続するとして、『競建内之』と『鮑叔牙與隰朋之諫』とを併せて排列する。

〈競1〉……〈競5〉＋〈競6〉＋〈競2〉＋〈競7〉＋〈競4〉＋〈競3〉＋〈競8〉＋〈競9〉＋〈競10〉＋〈鮑4〉＋〈鮑5〉＋〈鮑6〉＋〈鮑7〉＋〈鮑3〉＋〈鮑1〉＋〈鮑2〉＋〈鮑8〉＋〈鮑9〉

陳剣氏は、『競建内之』と『鮑叔牙與隰朋之諫』とを併せて一篇と見る。ただし、それぞれ異なる篇題が記されていることや、書写・筆画が『競建内之』と『鮑叔牙與隰朋之諫』とで異なることが、これら二篇を一篇とすることの障害になると述べる。

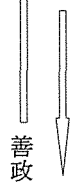
（4）補足・その他

陳剣氏の『競建内之』と『鮑叔牙與隰朋之諫』とを一篇と見る場合の解釈は次の通りである。

斉の桓公は日食に遭遇し、それを取り除く方法を考えようとした。鮑叔牙と隰朋とは、殷の高宗と祖己との故事を引いて、自然界の異常現象は上天・鬼神からの警告であることを説く。古えの人々は異常現象を恐れるだけでなく、「得福」であると見なす。また、天地鬼神は人君に対して諫諍に従うことと善政を行うこととを推し進めていると見なす。そして、もし適切に対応すれば、良い報いを受けられるのである。また、二大夫は、桓公が心のねじけた臣下、豎刁・易牙を任用したために、桓公と斉国とに様々な危害がもたらされると非難する。そこで桓公は、祭祀を行い、「老弱不刑」や道路・橋梁を修繕するなどの善政を行った。このように適切な対応をしたことによって、良い報いを得た。良い報いとは、晋の侵略を目に見えない形で停止させたことと、日食と桓公のある種の疾病は害を為さなかったこととである。

以上の陳剣氏の解釈を踏まえて、両篇の構造を整理したい。

両篇は共に、鮑叔牙・隰朋の二大夫が斉の桓公を諫める内容である。本篇でまず注目すべきことは、日食についてである。本篇では、日食という天体現象が災いの前兆であって、桓公の失政に対する警告であると解釈される。そして、君主が善政を行えば、災いは除去され、結果として良い報いがあるとされる。これは典型的な天人相関の思想であると言えよう。



では、桓公の失政の内容とはいかなるものか。その一

つに、豎刁・易牙を任用したこと、すなわち人材登用の失敗が挙げられる。春秋期においては日食は凶事と結びつけられ、漢代になると日食が政治を省みる一つの機会として機能していたとの記述が伝世文献に見られる(注2)。従って、本篇は日食と人材登用とが関連づけられていたことを明確に示す文献であると考えられる。

さらに注目すべきは、祭祀と善政との関係である。本篇においては、日食時の対応として祭祀が行われる。具体的には、「説」の祭祀を行うこと、紋飾のないの祭服を着用すること、器物を置くこと、犠牲・珪璧を捧げることなどが挙げられる。これらの祭祀を行い、さらに君主自身が善政を行うことが、災いを除去する方法として重要視されているのである。また、本篇では、「老弱不刑」、道路・橋梁の修繕というように、善政の具体的な内容をも記載している。

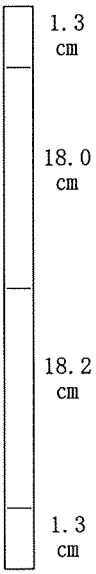
以上より、本篇は、日食は天からの警告であると君主が理解し、君主自身が祭祀と善政とを行えば、災いは除去され、結果として良い報いを得ることになるという構造を持つ文献であると言えよう。

『季庚子問於孔子』(きこうしこうしにとう)

(1) 書誌情報

釈文担当者は、濮茅左氏である。篇題は無く、冒頭の「季庚子問於孔子」より取る。現存二十三簡。完簡は八簡。整簡は四簡。残簡は十一簡。

編綫は三道。右契口。簡端は平斉。



現存文字数は六百六十九字(合文三十五、重文四)。また、〈9〉には墨釘がある。

(2) 概要

季康子と孔子とが、国の統治についての問答する内容である。季康子は孔子に「君子之大務」や、統治者としての徳の形成の方法、及び強権統治について問う。また、自らの昏昧による失政の危惧を述べ、孔子に打開策を問う。孔子は統治者としての君子のあり方を示し、孔子の

政治論が語られる。

（3）他の排列案

綴合復原された五簡（〈10〉・〈15〉・〈18〉・〈22〉・〈11〉）については、異論が提出されている。（筆者注：破断している竹簡の上部をA、下部をBとする。）

・陳劍氏（前掲論文）による排列案は、次の通りである。

〈8〉……（〈5〉）……〈21〉＋〈22A〉＋〈13〉＋〈14〉＋〈15A〉＋〈9〉＋〈10A〉＋〈10B〉＋〈19〉＋〈20〉＋〈23〉

・李鋭氏（「読《季康子問于孔子》札記」簡帛研究、二〇〇六年三月六日）による排列案は次の通りである。

〈10A〉＋〈10B〉＋〈11A〉＋〈18B〉＋〈19〉、〈17〉＋〈23〉、〈18A〉＋〈5〉＋〈11B〉、〈12〉……〈15B〉

・陳偉氏（「《季康子問孔子》零識（続）」、簡帛網、二〇〇六年三月二日）による排列案は次の通りである。

〈12〉……〈15B〉

・牛新房氏（「読上博（五）《季康子問于孔子》瑣議」、簡帛網、二〇〇六年三月九日）による排列案は次の通りである。

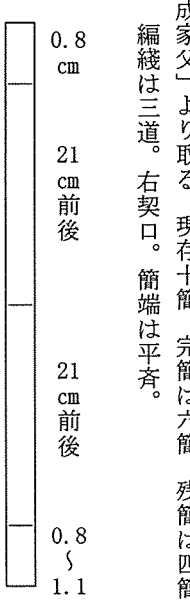
〈11B〉＋〈18A〉

・福田哲之氏（「上博四《内礼》附簡、上博五《季康子問于孔子》第十六簡的帰属問題」、簡帛網、二〇〇六年三月七日）は、上博楚簡第四分冊所収の『内豊』（馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（四）』、上海古籍出版社、二〇〇四年十二月）の附簡は、字体・契口位置の合致から『季庚子問於孔子』中に帰属するべきであるとしている。また、『季庚子問於孔子』の〈16〉は他の竹簡と字体が異なり、上博楚簡第二分冊所収の『昔者君老』の第二簡に接続するべきであると指摘している。

『姑成家父』（こせいかふ）

（1）書誌情報

釈文担当者は李朝遠氏である。篇題は無く、冒頭の「姑成家父」より取る。現存十簡。完簡は六簡。残簡は四簡。編綫は三道。右契口。簡端は平斉。



現存四百六十六字（重文八、合文二、合文的重文（合文であり、かつ重文）一）。

（2）概要

李朝遠氏の「説明」に基づく概要は以下の通りである。

本篇は、春秋中期の晋国の三郤（郤錡・郤犨・郤至）に関係がある。内容は、『左伝』・『国語』などの文献に近いところもあれば、異なるところもある。その基本的立場は、三郤に同情しているようである。

（3）他の排列案

・陳偉氏（「《苦成家父》通釈」、簡帛網、二〇〇六年二月二十六日）による排列案は次の通りである。

〈1〉＋〈6〉＋〈7〉＋〈8〉……〈2〉＋〈3〉＋〈4〉＋〈5〉＋〈9〉＋〈10〉

・沈培氏（「上博楚簡《姑成家父》一个編聯組位置的調整」、簡帛網、二〇〇六年二月二十一日）による排列案は次の通りである。

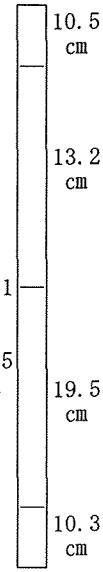
〈1〉＋〈6〉＋〈7〉＋〈8〉＋〈2〉＋〈3〉＋〈4〉＋〈5〉＋〈9〉＋〈10〉

『君子爲禮』（くんしれいをなす）

（1）書誌情報

釈文担当者は、張光裕氏である。篇題は、〈1〉の「君子爲豊（禮）」の句より取る。全十六簡。完簡は二簡。残簡は十四簡。

編綫は三道。右契口。簡端は平斉。



現存文字数は三百四十二字（重文五）。張光裕氏は、『弟子問』との関係について次のように述べる。『君子爲禮』と『弟子問』とは内容が類似しており、両篇を併せると四十一簡であるが、残欠が多いために両篇を併せて排列し難い。竹簡の契口・文字の書写・風格及び特徴などを仔細に見た結果、二種類に区分できる。「而」・「也」・「子」・「其」・「韋」の字の運筆・形体には、独特の写法がある。以上の基準、並びに結合部分の簡文の内容によって、『君子爲禮』及び『弟子問』は二つに分篇する。

「而」〈君2〉

〈弟9〉

「也」〈君2〉

〈弟9〉

「子」〈君1〉

〈弟1〉

「其」〈君3〉

〈弟4〉

「韋」〈君1〉

〈弟4〉

（2）概要

張光裕氏の「説明」に基づく概要は、次の通りである。

本篇の多くは孔子と弟子との間の問答に関するものである。篇中に顔淵が孔子の答えについて問う記述があり、その中で説かれる「礼」と「仁」との関係は明瞭である。本篇の「言之而不義、口勿言也。視之而不義、目勿視也。聽之而不義、耳勿聽也。動而不義、身毋動焉。」（〈1〉・〈2〉）と、『論語』の「顔淵問仁。子曰、「克己復礼為

仁。一日克己復礼、天下帰仁焉。為仁由己、而由人乎哉。」顔淵曰、「請問其目。」子曰、「非礼勿視、非礼勿聴、非礼勿言、非礼勿動。」顔淵曰、「回雖不敏、請事斯語矣。」

（顔淵）とは、大意が同じである。本篇は、「不義」とは「勿言」・「勿視」・「勿聴」・「勿動」であることを掲げ、これに反するものは「非礼」及び「不依於仁」であるとしており、その理論は明瞭である。また、『礼記』曲礼篇・玉藻篇等と比較できる内容である。さらに、〈10〉・〈12〉では、孔子を「仲尼」と称していることも貴重である。

（3）他の排列案

・陳剣氏（前掲論文）による排列案は、次の通りである。陳剣氏は、『君子爲禮』と『弟子問』の一部とが接続するとみなす。

〈君1〉＋〈君2〉＋〈君3〉＋〈君9〉＋〈君4〉、〈君7＋君8（接合）〉、〈君11〉＋〈君15〉＋〈君13〉＋〈君16〉＋〈君14〉＋〈君12〉……〈弟22〉、〈君10〉＋〈弟18〉

・陳偉氏（「《君子為礼》9号簡的綴合問題」、簡帛網、二〇〇六年三月五日）による排列案は次の通りである。〈9〉は、4つの残簡を一つに接合している。一つ目を〈9A〉、二～四つ目を〈9B〉とする。

〈3〉＋〈9A〉＋〈4〉＋〈9B〉

（4）補足・その他

『君子爲禮』では、孔門の活発な思想活動を見ることができる。文中に登場する人物は、孔子、顔淵、子羽、子貢、子産、舜、禹らである。前半部は、孔子と顔淵とが「礼」と「仁」の関係について問答を行っている。後半部は、子羽と子貢とが、孔子と子産とはどちらが賢人であるかという内容の問答を行っている。竹簡の欠損が多いために詳細は未詳であるが、他にも歴史上の人物と孔子とを比較していたと見られ、孔子こそが賢人であると顕彰している内容であった可能性がある。

また、〈16〉は「子治詩書」との記述が見られ、「六経」の成立にかかわる記事である可能性がある。

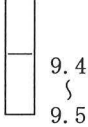
『君子爲禮』と『弟子問』の一部とは連続する可能性あるが、簡の欠損が多いため、簡の形制から判断することは困難である。

『弟子問』（ていしもん）

（1）書誌情報

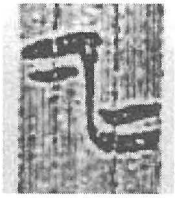
釈文担当者は、張光裕氏である。篇題は無く、整理者によって名付けられた。全二十五簡。完簡はなし。すべて残簡。それぞれの間が連続しているとは言い難い。張光裕氏は次のように述べる。本篇の附簡（上半分が残欠）は、初歩の整理時に『弟子問』諸簡と同列とみなしていた。契口の位置が未だに確認できないが、簡文の内容は大変重要であり、十分に研究価値があるために篇末に附した。この帰属の問題は、今後再び論定を行う必要がある。

編綫は三道。右契口。簡端は平斉。

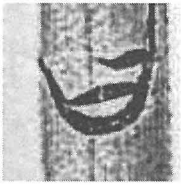


頂端から上契口までの長さは、〈3〉は十・四cm、〈13〉は十五・〇cmであり、契口位置にずれがあるために確定できない。

現存文字数は四百九十四字（合文二、重文二）。〈8〉の「子貢曰」の「曰」の字と、他の簡の「曰」の字とは、写法が異なる。


〈8〉

〈4〉


〈9〉

〈13〉

張光裕氏は、〈8〉と他の簡とを対比すると、字形・風格は極めて似ており、契口位置も同じであると述べる。さらに、同一篇中の「曰」の字に二種類の写法があることは、上博楚簡『相邦之道』にも見られるものであり、

ここでも一つに併せて排列する、としている。（筆者注：ただし、少なくとも〈8〉と〈4〉とは、契口位置が異なっているようである。）

〈1〉・〈12〉・〈13〉・〈17〉・〈24〉に墨鉤がある。

（3）概要

張光裕氏の「説明」に基づく概要は、次の通りである。

孔子と弟子との応対問答に関わる内容である。孔子と宰我・顔淵との問答、及び顔淵と子由、子羽と子貢との応答等を含み、問答の内容は多様である。例えば、「春秋不恒至、耇老不復壯。」（〈5〉）と言って、弟子にわずかな時間さえも惜しむべきであると訓戒する。また、「貧賤而不約者、吾見之矣。富貴而不驕者、吾聞而［未之見也］。」（〈6〉）は、『礼記』坊記・『論語』学而等の篇と照らし合わせることで、孔子の安貧処富の態度を比較することができる。

さらに、「食肉如飯土、飲酒如淆、信乎。」（〈8〉）と言い、食肉・飲酒の無節操さに借りて、大切にする行いを知らず、人に信用を置かせ難いことを言う。そして子貢は「莫信乎父母、死不顧生、可言乎其信也。」（〈8〉）として、正面から回答をせず、細かく意味を考えさせようとしている。

附簡の「考（巧）言窪色、未可謂仁也。」は、『論語』学而の「巧言令色、鮮矣仁」に相当する。簡本の「窪」は「善」である。「窪色」は「善色」を言い、その意味は「令色」に相当する。また、「窪」の字は楚国の青銅器にも見られる。これを楚の方言の特殊用字と見なすこともでき、注目に値する。

（3）他の排列案

・陳剣氏（前掲論文）による排列案は、次の通りでである。（残簡を適宜接合する。）

〈2〉＋〈1〉、〈7＋8（接合）〉、〈11＋24（接合）〉、〈12＋15（接合）〉、〈17＋20（接合）〉＋〈4〉

（4）補足・その他

『弟子問』の一部は『君子爲禮』に連続するという案があるが、契口位置が異なる（陳剣氏は、契口位置を考慮していない可能性がある）。〈8〉の契口位置は、他の簡とは異なっている可能性がある。

文中に登場する人物は、孔子、宰我、顔淵、子由、子羽、子貢、季子である。

『三德』（さんとく）

（1）書誌情報

釈文担当者は李零氏である。篇題は未見であり、現在の篇題は整理者によって加えられた。現存二十二簡。別に一簡（香港中文大学中国文化研究所文物館所蔵。これを附簡とする）。完簡は五簡。整簡は十簡。残簡は八簡。大部分は接続する（〈1〉～〈9〉、〈10〉～〈16〉、〈17〉・〈18〉）。ただし、〈19〉以下の五簡は残欠しており、位置を断定できない。

編綫は両道、右契口。簡端は平斉。

現存文字数は八百九十八字（合文二、重文九）。各簡には四十一～四十九字が筆写されている。墨鉤が数多くある。

（2）概要

張光裕氏の「説明」に基づく概要は、次の通りである。

『大戴礼記』四代に「子曰、有天德、有地德、有人德、此謂三德。三德率行、乃有陰陽。陽曰德、陰曰刑。」とあり、三才の德をもって陰陽刑德に配当するとしている。本篇の冒頭に類似した表現があり、それに依って篇題としている。また、篇中には韻文が多く、句読の区切りとなり、釈読する際の重要な依拠となる。

（3）他の排列案

・陳劍氏（前掲論文）による排列案は、次の通りである。

〈1〉、〈2〉＋〈3〉、〈4〉＋〈5〉、〈6〉＋〈7〉、〈8〉＋〈9〉、〈10〉＋〈11〉＋〈12〉、〈13〉＋〈14〉、〈15〉＋〈16〉

陳劍氏は以上のようなグループ分けを提案しているが、グループ間の連続関係は未詳としている。さらに、陳劍氏は一歩進めて、次のような排列を提案する。

〈1〉＋〈4〉＋〈5〉、〈13〉＋〈14〉＋〈19〉、〈17〉＋〈15〉＋〈16〉、〈21〉＋〈18〉、〈22〉＋〈6〉＋〈7〉〈12〉＋〈20〉

・侯乃鋒氏（「読上博（5）《三德》札記四則」、簡帛網、二〇〇六年二月二十七日）による排列案は、次の通りである。

〈2〉……〈1〉＋〈4〉＋〈5〉

（4）補足・その他

「天」・「地」・「人（民）」に関する内容であり、まず「天」・「地」・「人」が世界に対してどのようなものを提供しているかを説く。ただし、その後の内容のほとんどは「天」と「人」とに関係するものであり、「地」に関する記載は少ない。

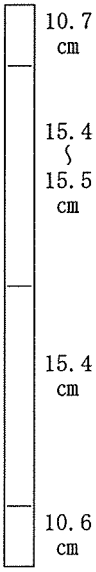
本篇における「天」と「人」との関係は、典型的な天人相関であり、人為が「天」に感応し、「天」が人為に応じた禍福を降すという思想が見られる。人格神として上天・上帝が位置づけられている点は、注目すべきである。また、本篇は君主の修身・修政の必要事項を訓戒しているため、為政者を対象として書かれたものであると考えられる。

『鬼神之明　融師有成氏』
（きしんのめい　ゆうしゆうせいし）

（1）書誌情報

釈文担当者は曹錦炎氏である。篇題は無し。『鬼神之明』は、整理者が内容に基づいて名付けたものである。『融師有成氏』は、冒頭五字より取る。現存八簡。完簡はなし。整簡は二簡。残簡は六簡。〈五〉の墨節によって、『鬼神之明』と『融師有成氏』とを分けている。

編綫は三道。右契口。簡端は平斉。



現存文字数は、『鬼神之明』は百九十七字、『融師有成氏』は百二十二字。〈1〉には空白があり、竹簡の表面を削った痕跡が残されているため、誤って書かれた部分を削除するために削られたものと見られる。また、〈2〉に墨節、〈2〉の背面に文字が十三字が筆写されている。これは、墨節部分に書き漏らしがあり、それを補うために〈2〉の背面に筆写したものと見られる。〈5〉の墨節によって、『鬼神之明』と『融師有成氏』とが分けられる。

（2）概要

曹錦炎氏の「説明」によると、『鬼神之明』は、『墨子』の佚文の可能性がある。墨子と弟子或いは他人との対話であり、討論の内容は「鬼神」には明らかなところと明

らかでないところがあるという問題に関してである。

『融師有成氏』は、上古の伝説上の人物の故事、祝融の師には成氏・蚩尤・伊尹等がいたこと、並びに夏・商の歴史に関わる内容を叙述している。

注

（1）斉藤国治・小沢賢二『中国古代の天文記録の検証』、雄山閣出版株式会社、一九九二年九月。

（2）中川綾子「中国古代の日食―唐代までの日食に対する意識・対応の変化」、『お茶の水史学』四十一号、一九九七年十二月。

［附記1］簡帛研究と簡帛網

これまでは「簡帛研究」（http://www.jianbo.org/ および http://www.bamboosilk.org/）に数多く論文が掲載されていたが、最近では掲載数が減っている。一方で、武漢大学簡帛研究中心の「簡帛網」（http://www.bsm.org.cn/）は、論文掲載数が激増している。これは、二〇〇六年六月二十六日～二十八日に武漢大学で出土文献の国際学会（「新出楚簡国際学術研討会」）が開催されることに関係していると見られる。今後、戦国楚簡に関する札記・論文等は、「簡帛網」が主体となっていく可能性も考えられる。

ただし、これらのサイトに掲載されているものは大半が論文ではなく札記である。字句解釈等に関しての短い考察が多く、論文と呼べるものは少ないのが現状である。

［附記2］

本稿の執筆に先立ち、筆者は二〇〇六年三月二十六～二十八日に大阪大学で行われた戦国楚簡研究会の第二十九回研究会にて第五分冊に関する発表を行った。その際に、浅野裕一先生（東北大学大学院環境科学研究科教授）、湯浅邦弘先生（大阪大学大学院文学研究科教授）、福田哲之先生（島根大学教育学部教授）、竹田健二先生（島根大学教育学部助教授）、菅本大二先生（梅花女子大学文化表現学部助教授）の諸先生よりコメントをいただき、それを参考にして補足・訂正を行った。